

洋書管理システムILAS-M20の考えかた

誌名	日本農学図書館協議会会報
ISSN	03858081
著者	山井, 康司
巻/号	55号
掲載ページ	p. 6-9
発行年月	1984年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



洋書管理システム ILAS—M20の考えかた

(Thoughts on the Processing System of
Western Books: ILAS—M20)

山井康司*

わが国の図書館界にコンピュータが導入されはじめてから、すでに20年になろうとしている。文部省は、将来の機械化時代、情報化時代の中堅をになうべき図書館職員を養成するために、昭和44年度より長期研修会を開催しはじめて今日にいたり、また、同時に大学図書館の改善をめざして毎年2～3の国立大学にコンピュータ導入の予算をつけ、主要な国立大学にはすでにほとんど設置されている。近年では、私立大学に対する文部省の研究設備整備等補助金においても、情報処理関係の助成は年々相当の額にのぼっている。

これら国立大学や一部大規模私立大学の図書館等が、国や設置者等による特別な予算の助成をえて導入してきた機械化は、あらかじめトータル・システムを前提とした大型コンピュータによるものが主であった。しかしながら、こうした機械化は、(1)館員の充分な理解と努力が確保されにくい；(2)経費が非常に高額となる；(3)システムの作成が難しい；(4)専門要員の養成と確保が必要である；(5)各館ともユニークなシステムを競い合う；(6)これらの結果として投入したものに比して経済性、実用性等に問題がある；というような多くの問題点がある。こうした問題は、機械化の進

行の早いアメリカにおいても、かなり深刻な状況を作り出し、失敗を認める事例報告さえも出される時期にいたっている。

一般に、コンピュータはハードウェアの規模に応じて、おおむね次の三段階に大別されている。

- (1)パーソナル・コンピュータ 100～300万円位
- (2)中規模システム(オフコン) 500～1,500万円位
- (3)大規模システム 1,500万円以上

コンピュータの価格は、記憶容量と処理スピードに比例するものと考えてもよく、図書館業務の機械化は最終的には蔵書の書誌情報(データベース)を中心にしたトータル・システムを目指すものであるとするなら、大規模システムが必要とされるのは当然であるかも知れないが、前に述べたように、はじめから大規模システムを導入することは非常に危険なことである。

中規模システムによる機械化は、ハードウェアの価格のみで考えれば、比較的導入の可能性が高いものと思われるが、(1)通常ソフトウェアの開発は個別におこなう必要がある；(2)その場合図書館側とソフトウェア作成者側

* Yasushi, Yamai, Nippon College of Physical Education Library,
Fukazawa, Setagaya-ku, Tokyo
農図協会報, No.55, 1984—9

との意志の疎通を欠くことが多い；(3)したがってでき上ったソフトを実際に動かしてみると使いにくく；(4)その修正はそれほど容易なことではない；(5)業務の拡張等を考えると当初からトータル・システムへの志向が強いため陳腐化が早い；(6)導入後の経済的負担が相当大きく；(7)専門要員の養成・確保が必要である；などの点で、中・小規模の図書館が圧倒的に多いわが国の図書館界では、なお危険が感じられ導入がちゅうちょされているのが現状である。

この数年、電子技術の飛躍的な発展により、一般社会においてパーソナル・コンピュータの普及がめざましく、図書館界においてもこれを看過するべきではないとして、3～4年前よりパソコンによるソフトの開発が急速に進められてきている。たしかに、パーソナル・コンピュータは前述のような危険が大幅に回避できて、導入しやすいものと考えられてきているが、個々の図書館でソフト（プログラム）を作成することは容易なことではなく、また、市販されている個別業務のパッケージにも、その設計の思想や実用性の上で多くの問題があるようである。しかもなお、昨今のパーソナル・コンピュータは、価格に対する性能の点で、中・小規模の図書館においては無視できない大きな魅力をもっているものである。そこで、従来問題とされてきた多くの点を全面的にチェックし直し、あくまでも機械化の目的とするものを確認しつつ、実用性のある標準的なシステムをパッケージ化することにより、より廉価で、より質の高い、誰でもがただちに使える簡易なもので、なおかつ将来を見通した機械化の総合計画の一環となりうることを目指して、図書館洋書管理システム ILAS-M20 は作成されたものである。

ILAS-M20 システムの開発には、プリン

タとして用いる欧文電子タイプライタおよびコンピュータを日本オリベッティ㈱が、タイプライタとコンピュータ本体を結ぶ専用インターフェースを㈱セコニックが、システムのプログラムはソフトウェアの専門である㈱システム・ラボが、そしてすべての開発に関するコーディネイタの役割とその普及に関しては㈱伊藤伊が責任をもち、その間に多くの図書館の現場の人たちからの専門的な意見が寄せられた。私自身は図書館の現場の一人として、もっぱら注文をつける立場として参加したに過ぎない。このことは、コンピュータのシステム開発が非常に多くの専門家のチームによる極めて多くの日時と労力の投入によってでき上るものであることを示しており、また、そのようなものでなければ実用に耐えられないものなのである。

今回、私はこのシステムの内容やプログラム、あるいは機械について述べるのではなく（それらについては、すでに多くの人びとが実際に機械に触れて説明を受けられているようである）、こうしたパッケージ化されたシステムの開発に参加した図書館の現場の人間として、とくに中・小規模の図書館が機械化を意図するとき注意しなければならないと思われる若干の問題点を、開発の裏話的に述べてみたいと思う。

前述のように、機械化システムの開発には、ハードとソフトの両面で優れた専門家によるチームが編成される必要があるが、導入する図書館側が注意しなければならないことは、開発の時点で直接関係した担当者が長期にわたって保証されるかどうかということである。チームの要員が優秀であればあるほど、それぞれの環境の中で配置換え等がおこなわれ易いのが普通であり、担当者が交替することによって引きつぎがうまくおこなわれぬ場合

には、すべてのしわ寄せは図書館側にくることになる。また、パッケージ化されたシステムの導入に当っては、その開発にかかわったチームの構成を知り、その開発の思想と将来に対する展開の考え方が充分理解されることが大切である。最近ではパソコンの普及と各種ソフトウェアの発表により、多少器用な人ならば、かなり容易に簡単なプログラムの作成をすることができるようになったが、パッケージ化されたシステムの導入に際しては、私はあえて不器用であることを奨めたい。コンピュータについて未経験の人が、画面と対話しながら容易に操作して一定の成果がえられるように作成されているのがパッケージ化されたシステムであり、その一部分が気に入らないからといって、たとえば少しばかり器用な図書館員がプログラムの修正をしようとすると、結果としてはシステムそのものを破壊してしまうこととなる。簡単そうに思われても、システムには多くの検討を重ねた思想と相互に関連しあう多くの文節によるプログラムが入っているものであり、その中の1行や2行を書き替えることによって、その館の不満が解決されるようにはならないのである。むしろ、事前の充分な検討を経て導入したら以後はそのシステムに合せて業務を処理していく決心をしたほうが安全であろう。つまり、仕事を改めることなくシステムの変更を要求することは避けるべきなのである。

次に、パーソナル・コンピュータの導入にあたっては、機械の限界を正しく認識しなければならない。昨今のパソコンの性能は飛躍的に進歩し、従来のいわゆるオフコン程度の性能を有するものも出現しはじめている。しかしながら、汎用大型コンピュータに対して、パソコンには当然一定の限界があるので、機械がどこまでできるのかを使用する者が正し

く知った上で、その機械に人間がどこまでやらせるかが問題となってくるのである。その両者の関係が良好に働いた時には、パソコンであっても相当の仕事ができる。今回のIL-AS-M20で、チームのスタッフが最も苦勞した点のひとつは、機械の容量と目録法上要求される書誌的な事項に対する桁数の配分であった。データ入力の容易さと、検索上の問題から、各エリアには一定の桁数を割り当てる固定長方式が採られることになったが、機械の容量にはトータルの大きさがあり、書誌情報1件ごとの大きさがきまれば入力できる件数がきまることとなる。書誌的データを詳しくすれば、入力できる数は減ることになる。また、ディスプレイに入力の画面がおさまらず、一応目録のルールに則ったすべての項目が必要にして充分な桁数だけ確保される必要がある。この点に関して非常に多くの検討がおこなわれたが、書誌情報のどのエリアをとっても、桁数の上限を決めることはできないわけであるから、パソコンを用い、固定長方式によることの本質的な限界があるといえよう。この限界の中で最大限のものを探究することが大変な苦勞であり、成功も失敗もそこにあるのである。

標準的な目録規則に忠実にしたがって、どこまでも完べきな書誌記述をおこなわなければならない、現場での役に立たないのであろうか。私の心の中で現在もなおひっかかっている疑問はこの点である。わが国の図書館の専門職員は、何事についても理論どおり、あるいは長年の自館の方式どおりでなければ決して妥協することを許さないという断固たる姿勢を堅持している人が非常に多い。パッケージ化されたパソコンによるシステムは、そうした姿勢を変えないままで検討されるような前提条件をもっていない。率直に言えば、そのような

場合には最初から独自のシステムを開発すべきなのであり、あるいは、機械化を検討する以前の問題があるのかも知れない。

ILASは今回のシステムで終るものではなく、決して充分なものでもない。最後に、われわれの今後の計画の概略を述べておこう。すでにわれわれのチームは、下記のような骨格となるサブ・システムを充実させ、それらの中から各館が自由に任意のシステムを選択して導入し、最終的にすべてのシステムを導入すれば、それぞれが互いに連結し合っただけで、トータル・システムが自然に完成するようなものを開発しており、近日中に発表される見込みである。

- (1) 図書管理システム（和書、洋書共用）
- (2) 雑誌管理システム
- (3) 貸出・返却システム
- (4) 予算管理システム
- (5) 蔵書点検システム

図書館における機械化は、たとえば、われわれが住宅を入手する際の方針として、買い替え型や、建て増し型や、あるいは特別な遺産などをもらって将来2世代、3世代が同居できるようにと大邸宅志向型等々があるよう

に、各館の方針によってさまざまの方策がとられることであろう。中・小規模の図書館においては、十分な現状分析と将来計画にもとづいて、可能な限り危険を避けながら、なお積極的な実践がおこなわれるべきである。上記のシステムは、個別業務のシステムとして作られるというよりは、むしろ、トータルな図書館の機械化システムの中から、現場における緊急度に応じた段階的な機械化を容易にすると同時に、それらがバラバラのものとして終始することのないように、相互の関連づけのもとに抜き出されてきたものであり、今後における中・小図書館の機械化の方向を策定したものである。各サブ・システムは、あくまでも実用性が重視され、各種のユニークな周辺機器があらたに開発され提供される。今回のILAS-M20洋書管理システムも含めて、ご意見やご感想を寄せて頂ける日をたのしみに行っている。

(注) 本稿は、昭和59年4月14日に開催された農学図書館情報セミナーにおける講演の記録に筆を加えたものである。

